

女性の 対応力

Adaptive capability of women

HONKAWA Yutaka

本川 裕

アルファ社会科学株式会社 主席研究員／統計データ分析家

知覚能力の性差

女性の対応力を考えるに当たっては、まず、人類学的な視点における男女の能力差を踏まえておく必要がある。

身体の大きさ、また、重いものを持ち上げたり、速く走ったりする身体能力においては、男性が女性を上回っていることは、あらためて言うまでもなかろう。一方、知覚能力については、表1に掲げたように、身体能力を補うかのように女性が優位な能力も多い。

一言で言うと、構造的な理解は男性優位、感覚的な理解は女性優位といえる。その理由としては、人類がサル

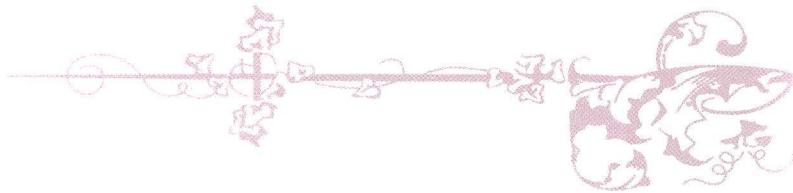
から分かれた歴史の大部分を占める狩猟採集時代において、男女がそれぞれ狩猟と採集・子育てを分担していたためと考えられている。

われわれが日常生活でよく経験する男女差、すなわち車による移動での目的地への到達が、男性の場合は主に地図上の「方角」や「距離」によって、女性の場合は主に「過去の経験」や「目印」によって実現することが多いという点も、狩猟に必要な能力と採集に必要な能力の違いを考えると理解しやすい。探し物でも、未整理の状況下では、圧倒的に女性優位だと感じる人は多かろう。

表1 人類の歴史の99%を占める狩猟採集時代に育まれたと思われる性差について

	能 力	内 容	解 釈
男性優位能力	視覚1	静止物も動体も男性の方が正確に見る。 視覚的空間把握能力も男性優位	同性間闘争、狩猟に役立つ能力
	空間認知、数理的推理	頭の中で物を回転させる必要のあるテスト、 モデル図形を複雑な図形から見つけるテストなどの男性優位	狩猟活動で役立つ能力
女性優位能力	視覚2	色盲は男8%、女0.5%	果実、毒キノコなどの採集の能力
	味覚	甘味、酸味、塩味、苦み、特に苦みの感度が女性の方がよい	植物採集上の能力。苦み(毒物)感度は妊娠・授乳を通して子どもに影響
	嗅覚、皮膚感覚、聴覚	匂い感度、皮膚感覚、聴覚は女性の方が高い	毒物察知。匂いで採集。赤ん坊の便の匂いを他の赤ん坊と区別。赤ん坊の泣き声の聞き分け
	類似性認知	モデル図形と同じものを似た図形から選ぶテスト、形にとらわれず同じ色のものを選ぶテストの女性優位	採集の能力
	ヒト認知、言語能力	視覚で物か人かを選択させるテストの女性優位。文章構成能力など言語の発達は女児の方が早い	子育ての能力(→保育、看護、教育など人の世話をするケア職業に女性が多い)

(西田利貞、人間性はどこから来たか：サル学からのアプローチ、京都：京都大学学術出版会；1999より引用)



年齢で変わる女性の好み野菜

女性の対応力という点で、まず紹介したいのは、女性の野菜の好みの世代差である。

図1は、男女・年齢別の好きな野菜ベスト10をあらわしたグラフである。1位と10位のポイント差が大きいほど好き嫌いが大きいことを示していると考えられる。好き嫌いが最も大きいのは女性の若年層(16~29歳)の16%ポイントである。男性はどの年齢層も10~12%だが、女性の場合は、若年層の16%ポイントから中年層(30~59歳)の6%ポイントへと急に好き嫌いがなくなる点が目立っている。品目的にも、全般的に、キャベツ、大根、たまねぎなどの人気が高いのに対して、女性の若年層だけ、さつまいもがトップとなるなどの特異性が目立っている。

女性の場合、独身時代の自分本位のわがままな好き嫌いが、有配偶年齢に到達すると子どものため、家族のための料理材料としての野菜評価へと、一気に転換するといってよいだろう。男性の場合、好きな野菜が年齢によってあまり変わらないのとは根本的に異なるパターンといってよい(ちなみに男性はネギ好きが目立っている)。

自分を押し通すべきか

文部科学省管掌の統計数理研究所が1953年から5年おきに行っている「日本人の国民性調査」は、同じ設問で長いスパンの日本人の意識変化をたどれる貴重な意識調査である。

この調査の中に、「しきたりに従う」ことの是非の意識を調べる設問がある。もともとは近代的な個人主義の意識がどの程度日本人にも普及しているかを確かめる設問だったと考えられるが、1950~60年代には多かった、正しいと思えば「自分を押し通せ」という意見がだんだんと少くなり、代わって、「しきたりに従え」あるいは「場合による」という意見が、だんだんと多く

なってくるという長期傾向が認められる(図2-A)。

こうした傾向は、日本人の保守化傾向を示すデータと見なされる場合が多い。確かに、近代的な個人主義が先進的な意識だとすれば、そういう判断も可能であろう。また、保守化を示しているのではなく、経済発展により自信を深めた日本人が欧米的価値観の影響を脱し、個人の主張を差し控えるという本来の国民性に回帰したという捉え方も成り立つ。しかし、保守化にせよ、本来の国民性への回帰にせよ、21世紀になっても同じ傾向がさらに深まっているのはやや解せない。むしろ、「自分を押し通せ」という考え方は、時代の変化が早く、価値観の変化も急な現代にあっては、状況不適応を引き起こす時代遅れの考え方となっており、むしろ、「場合による」という柔軟な考え方の方が状況対応能力の高さを示しているので選択する者が増えたと捉えた方が合理的である。

こうした見方で、男女の違いを図から読み取ってみると、「自分を押し通せ」は、継続的な減少傾向の中で常に男性が女性を上回っている点が目立っている。「自分を押し通せ」は、かつては、時代をリードする男性優位の考え方だったのに対して、今や、こだわりが邪魔して時代の変化についていけない男性劣位の意識に転化したといってよいのではなかろうか。一方、女性の方は、「場合による」が男性を上回ってどんどん回答率を上昇させており、状況対応能力の点で女性優位があらわになりつつあることを示しているといってよいだろう。

統計数理研究所は、同じ設問で国際調査を実施しており、その男女別集計結果を参考に付した(図2-B)が、これを見ると、どの国でも(米国を除く)、男性の方が「自分を押し通せ」の回答率が高くなっている。「自分が正しいと思うことを慣習や状況より優先させるのが男らしい」という価値観がいずれの国でも存在していることがわかる。こうした男らしさへのこだわりが各国で男性の時代不適応を引き起こしている可能性が高い。日本の場合は、かなり前から、むしろ国民全体で女性原理の方へとギアシフトを行っているのであり、そうした意味で

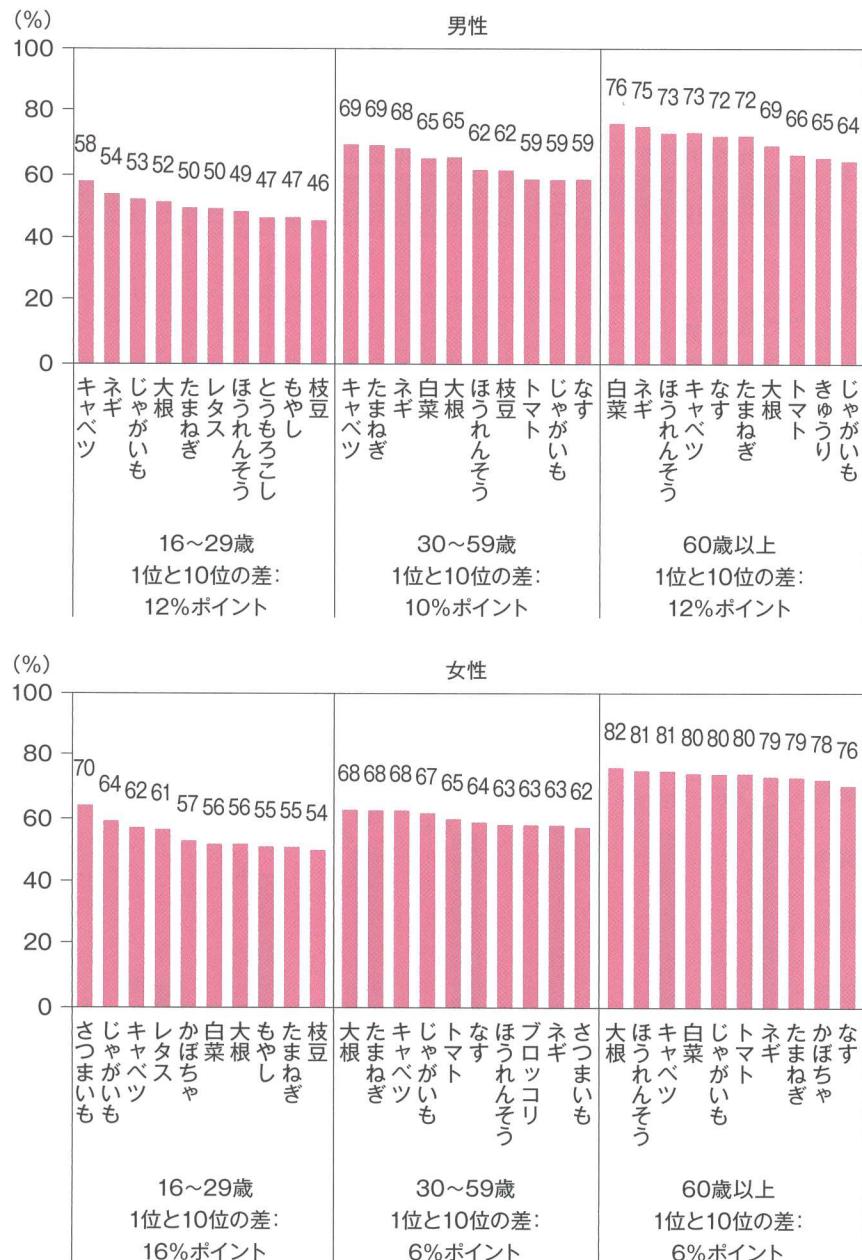
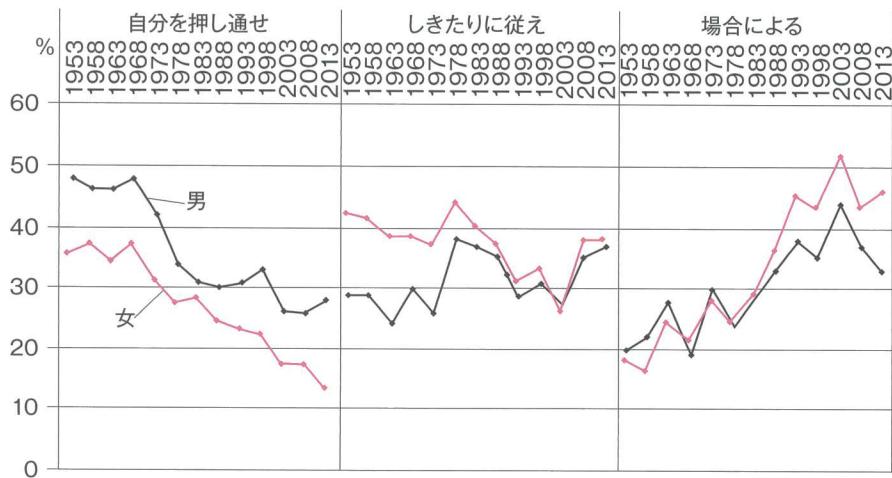


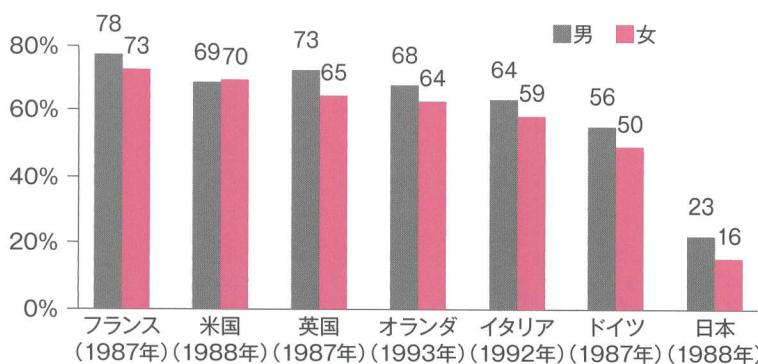
図1 日本人の好きな野菜(男女年齢別ベスト10)
複数回答結果
(NHK放送文化研究所世論調査部「日本人の好きなもの」2008年(2007年調査)より引用)

A あなたは、自分が正しいと思えば世のしきたりに反しても、それを押し通すべきだと思いますか、それとも世間のしきたりに、従った方が間違いないと思いますか？



(注)回答選択肢には上の3つの他「その他」「分からない」があるので足して100にならない。
(統計数理研究所. 日本人の国民性調査より引用)

B 国際比較：「自分を押し通せ」の男女別回答率



(統計数理研究所国民性国際調査委員会(編). 国民性七か国比較. 東京：出光書店；1998年より引用)

図2 状況対応能力は女性優位に

は、日本人こそ、現代に即応した国民性をもっているとも言えよう。

脱工業化社会への転換とともに 「女性の時代」が到来

20世紀の工業化社会では計画経済に有効性が認められて社会主義経済が生まれ、他方で、資本主義経済にお

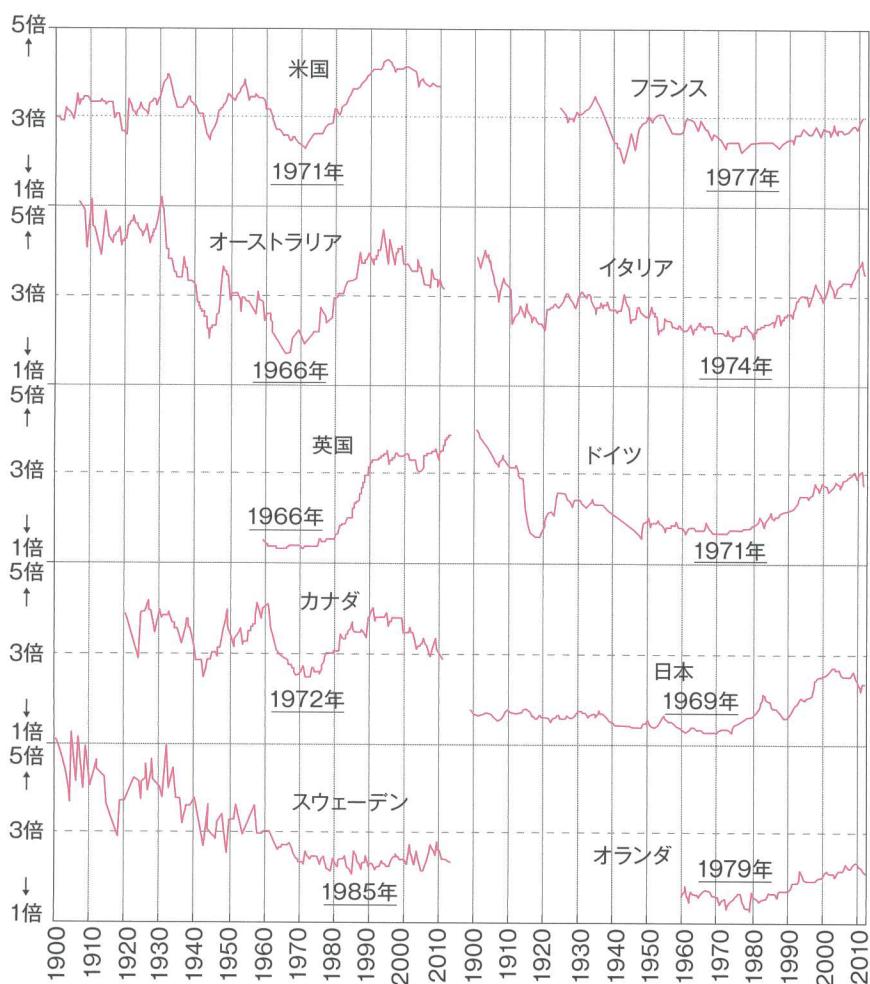
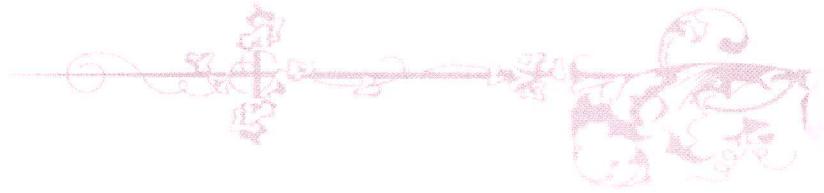


図3 自殺者数男女比の長期推移(1900～2013年)

(注)女を1とする男の倍率。下線つきの西暦年次はボトム年(第1次・第2次世界大戦時を除く)
(厚生労働省. 人口動態統計. 人口動態統計特殊報告. OECD.Stat 2015.10.16より引用)



いても大企業による組織的な経営が主流となった(経営史家のチャンドラーはこれをインビジブル・ハンドの時代からビジブル・ハンドの時代への転換と捉えた)。工業化社会では、計画性や組織性が極めて有効だったのである。ところが情報化、デジタル化、ネットワーク化が進む脱工業化社会では下手な計画性に意味が薄れ、ヒトへの進化を遂げた長い狩猟採集時代のなかで、狩猟を分担したため養われた男性特有の「計画能力の高さ」より、採集・子育てを分担したために養われた女性特有の「状況対応能力の高さ」の方が有効性を増してきた。

その結果、機械の発達によって男女の身体能力差の意味が薄れ、建設現場などの過酷な職場にも女性が進出するようになったように、知覚能力的にも、時代変化への

適応に女性優位が生じ、総じて「女性の時代」が到来していると考えられる。

図3には、主要国における自殺者の男性比率の長期推移を掲げた。1970年代頃から、世界の多くの国で、自殺者の男性比率が上昇する傾向が認められる。

工業化社会で理想だった、「男が外で働き、女は家庭を守る」といった家族像が、脱工業化社会の到来とともに、家族形態の多様化の中で崩壊し、男性が大きく自信を失ったことが一因と思われるが、より根本的には、これまで触れてきたような時代変化への対応力における男女格差の拡大という要因が横たわっていると考えられよう。